OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「屈」と「窮屈」 : 平安時代の公家日記を中心に
Author(s)	小山, 登久
Citation	語文. 1983, 42, p. 12-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「屈」と「窮屈」

――平安時代の公家日記を中心に――

小山登久

(一)

本稿は、平安時代の公家日記に見える「屈」字の意味を推定し、仮名文学における「くっす（くんず）」との関係を述べて、更に「窮屈」の語のわが国における意味について言及しようとするものである。

まず、平安時代の公家日記に見える「屈」字の用例を次に挙げる。

(1)就中老屈之身太以難耐、一夜種々定已及深更、心神悩、「小右記、長元1・11・29）

(2)伝聞、昨日晩定基僧都卒去云々、日来飲食不受用、経日衰屈、遂以死去云々、（左経記、類聚雑例、長元6・4・12）

(3)于時及深更、往反之間無為方屈了、（春記、長暦4・8・5）

(4)従今日可奉七ヶ日仮文之由執申…（中略）…予已屈了、仍為休身所思也、（春記、長久1・4・14）

(5)経月華門幷階下参陣方、（前略）命云、須着南殿、而屈了、時々休息可参上也、即着給陣、（春記脱漏補遺、永承3・3・13）

(6)自内有召、夜前供奉御幸之間、無極屈畢、仍申所労之由畢、（中右記、寛治1・2・11）

(7)侍人奉於六条殿、事趣者、大雨合屈候由、（後二条師通記、寛治4・12・21）

(8)予則退出、須参御共也、雖然数剋間無術屈、仍早退出、（殿暦、康和4・6・1）

(9)受領沙汰之間及辰剋、欲除目了之間、左府成文渡右府令結之、未聞、若親間如此歟、又老耄之剋終夜屈して如此歟、不知先例、可尋、（殿暦、永久5・1・20）

右の例(9)に「屈して」とあることから、これらの「屈」字は「くっ（屈）す」という漢語サ変動詞の表記であることがわかる。「くんず」との関係については後述する。

しかし、これらの「屈す」は、中国側の「屈す」の語義をもってしては意味が通じない。それでは、いかなる意味を表すのであろうか。

右の諸例の中で、「屈す」の語と文脈上、深い関連をもって共用されている語及び語句として、(1)「老」・(9)「老耄之剋」、(2)「衰」、(3)「往反之間」、(4)「身を休む」・(5)「休息」、(6)「所労」、(7)「大雨に会ふ」などが挙げられる。

例(4)(5)では、「屈す」が「身を休む」「休息」の原因となっていて、

(6)では「所労の由申す」の原因となっている。また、(3)では「往反」することが、(7)では「大雨に会ふ」ことが「屈す」の原因となっている。

これらの事実の上に、(1)「老」・(9)「老耄之剋」、(2)「衰ふ」を考慮に入れると、「屈す」は「身体（心も含めて）が悪い状態になる」意を表しているものと推測される。

なお、時期が少し下るが、『玉葉』に、

(10)今日、故摂政殿御月忌也、然而、去夜屈無レ術、仍不二参仕一、可レ謂二遺恨一云々、（仁安2・5・26）

とあって、この「屈す」の意味は、(10)の前日の記述に、

(11)依レ有二所労一、如二只今一者、難レ参、（同、仁安2・5・25）

とあるので、やはり「身体（心を含む）が悪い状態になる」意を表すと推測される。

更に、公家日記ではないが、平安時代に、同じ記録体で記された『明衡往来』に、

(12)今夏炎気倍於例年…（中略）…且往反之間厳牛可屈歟。（上本、少納言源）

とあって、「屈す」は人だけでなく動物にも使われているが、「例年より暑い夏に往反する」ことが、「屈す」の原因となっているので、この「屈す」も前述の意味に同じである。

以上のことから帰納して、

(13)須今日帰洛、而人馬共屈了、仍明旦可帰之由示別当了、（左経記、長元1・3・13）

の「屈す」もまた、前述の意味に等しい。

しかし、「身体（心を含む）が悪い状態になる」とは意味範囲が広すぎる。具体的にはいかなる意味であり、いかなる日本語に換言されるべきものであろうか。

ここで、更に平安時代の公家日記における「屈す」の語例を挙げると、

(14)宮被仰云…（中略）…連日饗宴、人力多屈歟、（小右記、長和2・2・25）

(15)今日節会、称物忌之田不参、多是夢想不閑之上、年老精進身已屈也、（小右記、寛仁2・1・16）

(16)今日請六箇日仮、触産穢由、奔波間身力已屈了、本性稟庶弱之故也、（春記、長久1・4・15）

(17)予今夜宿侍、不論昼夜奔営、筋力已屈了、不知為方、（春記、長久1・9・20）

(18)身力已屈、不能出仕、（帥記、承暦4・5・9）

(19)心力已屈、終日蟄臥、（帥記、承暦5・1・22）

(20)予終日祇候、依力屈、示付少納言云、若御産気急者可告者、仍白地退出了、（帥記、永保1・4・17）

(21)次僧侶為先威従、入自長楽門昇着之中、永超律師被扶従僧参上、暫居高座下欲昇着、有力屈不能昇気色、（帥記、永保1・6・18）

(22)成清力屈申障、及十三度被免了…（中略）…次還御、予依身力屈竊以退出了、（帥記、寛治2・8・7）

のようであって、時期が少し下るが『明月記』にも、

(23)暁帰冷泉、依心神屈不出行、（承元1・2・7）

とある。

最初に挙げた例(1)～(13)までの例は、何が―人や牛馬などでなく、

もっと具体的に―「屈す」のかという、「屈す」の主体が記されていない。すなわち、「屈す」が単独で使用されているのに対して、これらの諸例では、「屈す」の主体が明示されている点で異なる。すなわち、「人力」「年老い精進の身」「身力」「筋力」「心力」「(心身の)力」「(身体の)力」「心神」などが「屈す」の主体になっているが、それらの主体が、精神の力や肉体の力に限られている点が注目される。

ところで、これらの「屈す」はどのような意味であろうか。ここで、中国側の「屈」の語の用例を見てみよう。

(24)食太倍不レ顧二其後一俄則屈安窮矣。屈、竭也。(荀子、巻第二、栄辱篇、第四)

(25)脩二火憲一、養二山林藪澤草木魚鼈百索一、以レ時禁発、使二国家足一レ用而財物不レ屈、虞師之事也、屈、竭也。(同、巻第五、王制篇、第九)

(26)夫太上之道、生二萬物一而不レ有、成二化像一而弗レ宰。…(中略)…忽兮恍兮、不レ可レ為レ象恍、恍兮忽兮、用不レ屈兮、屈、竭也。幽兮冥兮、應二無形一兮、遂兮洞兮、不二虚動一兮。(淮南子、巻一、原道訓)

(27)初一、中冥独達、迥迥不屈。屈、盡也。(太玄経、巻第一、達)

のように「屈、竭也」「屈、盡也」とある。

また、『広韻』に「竭(盡也)」とあり、わが国の古辞書では『篆隷万象名義』に「竭盡」とあり、『観智院本類聚名義抄』に「屈ツキヌ」「竭ツキヌ・ツクス」「盡ツキヌ」、『色葉字類抄』に「尽ツクス…竭…醼酒飲盡也 已上尽也」(津、辞字門)とあるので、右に挙げた中国側の例の「屈」は「つきる」の意味と推定される。

次の中国側の二例の「屈」もこの意味と推定される。

(28)儻然立二於四虚之道一、倚二於槁梧一而吟。目知窮二乎所レ欲レ見。力屈二乎所レ欲レ逐。吾既不レ及レ已。夫形充二空虚一。乃至二委蛇一。女委蛇。故怠。(荘子、巻之五、天運第十四)

(29)贊曰、安平立レ節、雅性貞亮。高密含レ和、宗室之望。新蔡遇レ禍、忠全元喪。譙門狗レ義、力屈志揚。勲自貽レ戚、名隕身亡。順不二恤忌一、流二一播遐方一。(晋書、列伝第七、安平獻王)

そこで、さきに挙げた例(14)～(23)の「屈す」を「つきる」の意味とすると全文の意味は通じるのであるが、ここで注目すべきことは、これらの「屈す」の主体が、さきにも述べたように、精神の力や肉体の力に限られているのに対して、中国側の「屈」の語の主体は、(28)(29)のように「肉体の力」「心身の力」の場合もあるが、その他の例のように、それらに限られないことである。

また、文中に「屈」の主体が記されていない場合でも文脈の上から、それが推定され得る。

すなわち、公家日記において「屈す」が「つきる」の意味で使用される場合には、その用法が限定されて、その主体は「精神の力・肉体の力」に限られるのである。

さて、そこで、本稿のはじめに挙げた「屈す」の単独用法の場合の意味について更に考察を加えてみよう。

「屈す」と文脈上、深い関連をもって共用されている語や語句との関係から、「屈す」は「身体(心を含む)が悪い状態になる」意味と推測されたが、この意味も、「屈、竭也」「屈、盡也」という、「つきる」の意味から出ているのである。

すなわち、「屈す」が「つきる」の意味で、その主体を伴って使用される場合には、語の用法が限定されて、「精神の力・肉体の力」について云う場合にのみ使用されたために、その意味が「(精神の力・肉体の力)がつきる」となり、更に「屈す」が単独で使用されるに及んで「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味となったと推定される。

さきに挙げた「屈す」の語の単独用法の諸例は、「屈す」を「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味にとることによって全文の意味は通じるが、更にこれを支持する事実を以下に述べる。

『今昔物語』に、

(30)其時、外道、高楼登見、佛、家家追給、日高成供養不受疲極返給、女弃菸水受咒願給見…(以下略)(巻第一、佛、入婆羅門城乞食給語第十一、一、76)

(31)太子、此見退返給、鴦堀魔羅叫追行、疾迯給、遅追故、太子前立給、鴦堀魔羅疲極不追付。(巻第一、鴦堀魔羅、切佛指語第十六、一85・10)

(32)然不罷行程羸極我命可絶、菓・蓏拾為山野罷出間、此子共師子預師子預奉。(同、巻第五、師子、哀猿子割肉与鷲語第十四、一368・9)

とある「疲(羸)極」を、日本古典文学大系本(昭和40年2月発行)では「疲(羸)極」と読み、校注者は第一巻の補注の項で、「ここにおいてか、上の疲もしくは羸と下の極とは同義にして、しかも上は訓により、下は音に基く、一種の重言たることを知る。」と述べられている。

とすれば、

(33)右府疲屈給了云云、尤不便事也、(春記、長久2・3・27)

の「疲屈」は、上下同義で、上は訓により、下は音に基く一種の重言と理解してよいことになり、「屈す」は「疲れる」の意味と見てさしつかえはない。

また、時代は下るが、『温古知新書(尊経閣文庫本)』に「惢、疴屈」(態芸門)と見えることも、「くたびる」が「疲れる」と類義語であって、「くたびる」の方が時代的に後出の語であることを考えると、「屈す」の語を「疲れる」の意味に理解してよい一つの証左といえよう。

なお、「困ず」は仮名文学語、「疲る」は漢文訓読語と云われていて、両者は位相語である。前述の『日本古典文学大系本今昔物語』の補注で、校註者は、「困」の字面の代りに「極」字があてられるべき場合のあることを述べられているが、「困ず(極ズ)」「疲る」と同様に、「疲れる」の意の「屈す」も記録語―主として記録体によって記された文章に見える語―であって、位相語である。

従って、今昔物語には「疲(羸)極」とあり、平安時代の公家日記には「疲屈」とあることは、今昔物語の文章と平安時代の公家日記の文章との位相差を示すものである。

また、『吾妻鏡』に、

(34)北條殿父子三人。亦与景親等。依令攻戰給。筋力漸疲兮。(治承4・8・24、3)

(35)義澄等雖相戰。昨(由比戰)今兩日合戰。力疲矢盡。臨半更捨城逃去。(同、治承4・8・26、4)

とあって、「筋力漸疲」「力疲」とあることは、例(17)に「筋力已屈」、

(20)(21)(22)に「力屈」とあることと比較すると、『吾妻鏡』の文章と平安時代の公家日記の文章との位相差を示すものである。

(二)

ここで、平安時代の仮名文学の方面に目を転じてみよう。

(36)ひるは、さてもまぎらはし給ふを、ゆふくれとなれは、いみしくくし給へは、かくては、いかてかすこし給はむと、なくさめわひて、めのともなきあへり。(源氏物語、若紫)

(37)ひめ君、いかにつれ〳〵ならん、ひころになれは、くしてやあらむと、らうたくおほしやる。(同、花宴)

(38)(前略)院には、猶、このたいにのみものせさせ給なめりな。かのおほんおほえの、ことなるなめりかし。この宮、いかにおほすらん。みかとの、ならひなくならはしたてまつり給へるに、さしもあらて、くし給にたらんこそ、心くるしけれと、あいなくいへは(以下略)(同、若菜上)

(39)(前略)もてまいりて、みれは、ひめ君ふたところ、うちかたらひて、いと、いたうくんしたまへり。(同、竹河)

〔以上は、池田亀鑑氏著『源氏物語大成　校異篇』による。句読点は私に施した。以下も同じ。〕

(40)只今、猶此の御返事たてまつらんとて、取りむかふに、人々、かんたちめなと、神の事申にまいり給へれは、西おもてに出居て、物聞えなとするにまぎれぬ。こと人はた、さしてえたらん人こそせめとて、やみぬ。猶、此の事にすくせなき日なめりとくんして、今はいかて、さなむいきたりしとたに、人におほきかせしなとわらふ。(三巻本枕草子、第百四段、五月の御さうしのほとしきに)

〔田中重太郎氏編著『校本枕冊子』(古典文庫)による。句読点は私に施した。〕

(41)面影におぼえて悲しければ、月のけうもおぼえず、くんじ臥しぬ。(更級日記)

(42)「心にまかせて遊びたはぶれして、侍ひよかりぬべく、君の、いといたくくんじたまへる御心をも、『世の憂きよりは』と、思しなぐさめさせん」と、(以下略)(夜の寝覚、巻二)

(43)身のおぼえかたはしに、いみじくくんじ卑下せられて、かくてものし給ふほど、むかしよりの心のうちを、あはれとも、心憂しとも、きこえ知らせんとて、(以下略)(同、巻三)

〔右の例(41)〜(43)は『日本古典文学大系本』による。(42)(43)の「くんじ」は「屈じ」とあるが、大系本の底本の表記に従って改めた。あとで挙げる『落窪物語』の例も同じ。〕

右の諸例の「くす」「くんず」は、すべて「心が沈む」の意味であるが、平安時代の仮名文学では、この意味で使用される場合がほとんどである。

次に、右の例(36)の「くし」について、『帳江入楚第五』(国文学註釈叢書七)に、

いみじうくし給へば　ことのほか屈したる也。

とあって、「くし」を「屈す」の語と解釈している。

「くっす」が「くんず」となる語形の問題については、平安時代に促音の「ッ」も撥音の「ン」も共に「レ」の如き符号で表記せられていたので「くっす」が「くんず」ともなったという説(たとえば、『源氏物語一』〈日本古典文学大系〉の補注)が一般的である。

以下には、「くす」「くっす」「くんず」を代表して「くっす」ということにする。

それでは、なぜ、「くっす」が「心が沈む」の意味を表すようになったのであろうか。

佐藤喜代治氏は『日本の漢語』(角川書店)の中で、

(44)高祖因狎二侮諸客一。遂坐二上坐一無レ所レ詘。(漢書、高帝紀)

の「詘」を「ひるむ」の意味であるとして、「詘」字は「屈」の古字であり、『源氏物語』の「屈す」はこの「詘(屈)」の意に基づくのであろうが同一ではないとされる。

しかし、筆者は、この「心が沈む」の場合も、「屈、竭也」「屈、盡也」すなわち「つきる」の意味が基になっていると考える。

平安時代の公家日記に見える単独用法の「屈す」は「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味であり、詳しくは「精神の力・肉体の力が尽きる」の意味であった。その場合の「精神」とは、体の機能や組織の面における精神であり、言い換えれば、生理的な方面での精神であるが、仮名文学の「屈す」は、感情的、情緒的な面における精神、すなわち生理的な精神に対して、心理的な方面での精神が尽きるの意味であることから「心が沈む」の意味を表すと考えられる。

なお、

(45)少将、落窪の君とは聞かざりければ、「何の名ぞ、落窪は」といへば、女いみじくはづかしくて、「いさ」といらふ。「人の名にいかにつけたるぞ。論なうくしたる人の名ならん。きら〳〵しからぬ人の名なり。(以下略)(落窪物語、巻之一)

(46)みちかひにてたに、人か、なにそとたに、御覧しわくへくもあらす、まつ、をひはらひつへきしつのおの、むつましう、哀に、おほさるゝも、われなから、かたしけなく、くしにける心のほと、思ひしらる。(源氏物語、明石)

の「くっす」は「卑屈になる」の意味であるが、「心が沈む」の意味から転じたものであろう。

ここで、公家日記に見える単独用法の「屈す」と仮名文学における「くっす」の異なる点をあげると、前述の「精神的な力が尽きる」の「精神」の質の違いのほかに、公家日記の方には「肉体的な力が尽きる」の意味があって、人以外に牛、馬などについてもこの語が使用されるが、仮名文学の方にはこの意味がなく、従って人についてのみこの語が使用される。また、仮名文学の方では、「くっす」が他の語と複合して、「言いくっす・うちくっす・思ひくっす・おぼしくっす・物思ひくっす・くっしいたげなり・くっしいたし・くっし入る・くっしじめる・くっしじをる・くっしすぐ・くっしはつ」などの複合語をつくるが、公家日記では、前述の「疲れ屈す」の重言の場合を除いてこの用法はない。

(三)

『小右記』に次のような記述が見える。

(47)桑糸二疋、綿二屯、遺雅楽頭為成真人許、従去年或病、或患、或窮屈、至今不出仕、無衣裳云々、仍所給、(万寿2・2・2)

右の例の「窮屈」は、「病」「患」という、「身体が正常でない状態になる」意味の語と並列して使用されている。

また、少し時期が下るが『明月記』に、

(48)今日昨日事不発、只咳病猶以無術之上、心神窮屈無為方、(正治2・11・1)

とあるので、「窮屈」という語は、肉体だけでなく心についても使用されることがわかるが、本稿の㈠に挙げた同じ日記の、例㉓の「依心神屈不出行」と比較すると、「窮屈」と「屈す」とは同義の語ではないかと推測される。

そこで、「窮」の語義を調べると、

㊾指窮二於為一薪。火伝也不レ知二其盡一也。（荘子、養生主第三、第五為薪説）

の郭象の注に、「窮、盡也。」とあり、また、

㊿二人交射、中路矢鋒相觸、而墜於地一而塵不レ揚。飛衛之矢先窮、紀昌遺二一矢一。（列子、湯問第五、第十四章）

の「窮」は、「飛衛の矢がまずつきて、紀昌は一本の矢を残していた。」というところに出ているので、「つき（尽）る」の意味である。

また「西大寺本金光明最勝王経古典の国語学的研究』（勉誠社）による）に「窮クること無し」と見えるので、前述の「屈」の語義と同じく「つきる」の意味であって、「窮屈」は「つきる」の意味の連文ということになる。

そこで、「窮屈」を公家日記の「屈す」と同じように「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち「疲れる」（ある場合には「からだが弱る」）の意味にとると例㊼㊽の全文の意味は通じる。

以上に述べたことから、次の

(51)盛長来云、殿御使也、命云、定窮屈如何、明日院前駈馬為之如何、承給了、（後二条師通記、寛治6・4・20）

(52)天皇、還二一御土御門内裏一、予依二窮屈一不参、（台記、康治1・11・19）

(53)連日窮屈、病身誠以辛苦、巳時許忽振出、（明月記、正治2・10・29）

(54)巳時大僧正被来訪、参北野、平野、清涼寺、法輪寺、更無窮屈之氣、今年八十六（明月記、嘉禎1・5・3）

の「窮屈」は、公家日記の「屈す」と同じく「疲れる」の意味で使用されている。

また、公家日記ではないが、『新猿楽記』にも

(55)年十八。容顔美麗。放逸豊顔也。一偏立二妖艶之道一。未二嘗知一世間之上一。雖然養二沈論窮屈之性一。罷二世路喧囂之思一。

のような例が見えて、この「窮屈」も公家日記の場合と同じ意味である。

『明月記』には、「窮屈」という語がよく使用されていて、これを佐藤喜代治氏は、前述の『日本の漢語』の中で、「体の苦痛を言い表すのに用いている。」と述べておられるが、前述のように「疲れる」（ある場合には「からだが弱る」）の意味や原義のままで「精神の力・肉体の力がつきる」の意味で使用されていると筆者は考える。なお『古事談』に、

(56)南京永超僧都ハ無二魚肉一之限者。叱非叱モ都不レ食之人也。公請勤テ在京之叱久不二魚食一。窮屈シテ下向之間。於二丈六堂辺一昼破子之叱。弟子一人近辺ノ在家ニテ魚味ヲ乞テ令レ勧レ之云々。（第三　僧行）

とある「窮屈シ」は、「精神の力・肉体の力がつきる」の原義から「からだが弱る」の意味で使用されている。

また、『高山寺本古往来表白集』に、

(57)而頃一年相一就因縁経一廻一外土適還京都貧遺為宗毎見窮屈之

愁弥増哀憐之思

〔返点は省略。付訓も必要な部分のみを記した。〕

とある「窮屈」は、『色葉字類抄』に「窮屈キウクツ 貧賤分 キウクキツ」（木、畳字門）とあり、また文脈の上からみても「まずしい状態」の意味を表す語と推定されるが、この場合は、「窮、盡也」すなわち、「つきる」が金銭の方面に使用せられて「金銭がつきる」の意味から「まずしい状態」の意味になったと推定される。

さて、公家日記においては、

(58)今日窮屈察思食、退出可休息之旨有勅定、（経俊卿記、正元1・6・5）

(59)予帰北山、千時酉終刻、夕座儀法如例、窮屈無治術、（公衡公記、弘安6・8・7）

(60)改元已下事、不盡(審)之間、尋申右相、返報続之、自是可申之由思給候処、両条仗議始終奉行、至辰三点退出、窮屈以外候之間、于今平臥候つ、仍于今不令申候つ…(中略)…群議之趣、此間以泰尚朝臣委可令申候也、窮屈猶悃然之間、併令省略候也、（園太暦、延文1・3・29）

(61)一献後入御之間、余退出、依窮屈也、（兼宣公記、嘉慶1・1・7）

(62)右兵衛督亭へ倉部・教豊・徳菊丸罷参、予聊窮屈之間不出、姫御料罷向、（教言卿記、応永13・1・13）

のように、中世に入っても「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち、「疲れる」の意味で使用されている。

ところが、『日葡辞書』（土井忠生氏他編訳『邦訳日葡辞書』＜岩波書店＞による）に、

Qiŭcut. キュウクツ（窮屈）すなわち，Qinotçumaru coto. 1, taicut.（氣の詰まること．または，退屈）倦怠を覚えること，または，氣がつまること．

とあるように、

(63)早旦退出、行水、今日安閑窮屈之間大略終日平臥、（実隆公記、文明8・1・22）

のような例が室町中期頃になると現れる。

右の例の「安閑」は『日葡辞書』に、

Ancan.（安閑）Yasuqu, xizzucana.（安く，閑かな）平和，あるいは，静穏．

とあるので、右の「窮屈」は「退屈」の意と推定される。

なお、ついでに付け加えると、「窮屈」の語が「狭苦しい、不自由だ」という今日的な意味になるのは、佐藤喜代治氏が前述の『日本の漢語』の中で挙げられているように、『大蔵虎明本能狂言』の、

(64)こなたのお屋敷がせばうござって、御きうくつに御座らうと思し召し、あなたに広々とした屋敷をとっておかせられてござるほどに、（以下略）（武悪）

の例の頃からであろう。

『太平記』に、

(65)丹誠無二ノ御勤、感応ナドカアラザラント、神慮モ暗ニ被レ計タリ。終夜ノ礼拝ニ御窮屈有ケレバ、御肱ヲ曲テ枕トシテ暫御目睡在ケル御夢ニ、（巻第五、大塔宮熊野落事）

とある「窮屈」について、日本古典文学大系本の頭注に「心身の不自由なこと」とあるのは、時代的に見て無理であって、「疲れること」

という意味と理解すべきである。

さて、後になってしまったが、「窮屈」の語は、中国側ではいかなる意味で使用されているのであろうか。

たとえば、

(66)君之不二令民一、父之不二孝子一、兄之不二悌弟一、皆郷里之所釜甑者而逐レ之。憚二耕稼採薪之勞一、不レ肯レ官二人事一、而祈二美衣侈食之楽一、智巧窮屈、無二以為一レ之。(窮極 屈盡)(呂氏春秋、巻十、安死)

とあるように、右の例の「窮屈」は、「窮、極」「屈、盡」と注があり、「窮」は『観智院本類聚名義抄』に「キハマル」とあるので、「窮屈」は「きわまりつく」の意味となるが、前述のように「窮屈」を「つきる」の意味の連文と見て、右の例の「智巧窮屈」を「知恵と技巧も尽きて」と解釈することも可能ではないかと考える。

この考えが許されるならば、わが国の「窮屈」の語の意味は、「屈」の語の場合と同じように、中国側の、連文としての「窮屈」の用法が限定されて、「窮屈」の語の主体となるもの—何がつきるのかの、「何が」にあたるもの—が限定されたところから成立したということができる。

以上に述べてきたことをまとめると、次のようである。

「つきる」という意味の「屈す」という語は、中国側の「屈」の語の用法が限定されて、「屈す」の主体が「精神の力・肉体の力」にのみ限定され、次に、「精神の力・肉体の力がつきる」すなわち、「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味となって「屈す」の単独用法が生じて、それらの例は平安時代の公家日記に見える。そして、この場合の「精神」とは、生理的な精神であるが、これが心理的な精神となる一方で、「屈す」が「肉体の力」を主体としなくなり、「屈す」が「心理的な精神がつきる」すなわち、「心が沈む」の意となって、仮名文学における「くっす(くんず)」が成立する。

わが国における「窮屈」の語もまた、中国側における「窮屈」の語の用法が限定されて成立したものであって、公家日記における、「屈す」の単独用法の場合の意味と同様に「精神の力・肉体の力がつきる」という意味を原義として、「疲れる」(ある場合には「からだが弱る」)の意味を表すが、この語は「屈す」よりも多義である。

なお、公家日記に見える単独用法の「屈す」は、記録語という位相語であることも見過ごしがたい事実である。

○本文中に明記しなかった使用テキスト

荀子・呂氏春秋・淮南子・太玄経—四部叢刊、列子・荘子—漢文大系、晋書—和刻本正史、

小右記・後二條師通記・殿暦—大日本古記録、左経記・春記・中右記・帥記・台記—増補史料大成、公衡公記・園太暦・兼宣公記・教言卿記・実隆公記—史料纂集、玉葉—すみや書房、明月記—国書刊行会、吾妻鏡—新訂増補国史大系、経俊卿記—図書寮叢刊、明衡往来(雲州消息)・新猿楽記—群書類従、